

海外駐在員家族の異文化適応を支える心理的ケア

——家族の対話の視点から

家族帯同の海外赴任中に現地で生まれた子どもは、親とは異なる環境で育つことを強いられる。そうした子どもたちと向き合い、家族が一丸となって困難を乗り越えた経験者によるアドバイス。

TCK Family Navi

代表 子安 芙美

家族全員の異文化への挑戦

海外駐在が決まるとき、多くの場合、最初に決断を下すのは赴任を命じられた保護者です。しかし、会社に「Yes」と答えたその日から、異文化への挑戦は家族全員のものとなります。その環境の変化を最も長い時間をかけて引き受けていくのが子どもです。

言語や文化、友人関係の変化の中で、子どもたちは自分の意思とは関係なく少数派として生活する経験を重ねていきます。新しい環境への適応が期待される一方で、その過程に伴う戸惑いや喪失感はずしも周囲から理解されやすいものではありません。だからこそ、海外駐在を選択する保護者には、子どもが経験する変化を理解し、支えていく視点が求められます。

「日本に行ってもいいよ」

私の子どもたちは海外で生まれ育ち、長男が11歳、長女が5歳になったとき、日本へ本帰国することになりました。子どもたちにとって日本は「帰る場所」ではなく、新たに向かう外国のような場所でした。本帰国が決まったとき、息子は夫に尋ねました。

「パパは日本でその仕事がしたいの？」

夫が挑戦したい仕事であることを伝えると、息子は少し考え、「パパがやってみたいなら、日本に行ってもいいよ」と答えました。

その言葉には、自分が築いてきた学校生活や

友人関係、慣れ親しんだ街の日常から離れることへの思いがにじんできたように感じられました。思春期を迎えつつあった子どもにとって、それは自らの生活環境の大きな変化を受け入れる決断でもありました。

このやり取りを通して、海外駐在という選択が大人だけの決断ではなく、子ども自身もまた人生の変化に揺さぶられる経験であることを実感しました。家族は単なる同行者ではなく、環境の変化を共に乗り越えていくチームなのだと改めて気付かされました。



家族はチーム
帰国直前におそろいのTシャツ
で、思い出のある公園で撮影

国際移動を経験する子どもたち

海外では現地社会への適応が求められ、帰国後には「帰国生」として再び新たな環境に向き合うこととなります。このような国際移動を経験する子どもたちはサードカルチャーキッズ(TCK)^{*1}と呼ばれ、複数の文化の間で成長しながら独自の文化観を育んでいくことが知られています。

^{*1} サードカルチャーキッズ(TCK)：親の転勤や移住などで母国以外の異文化圏で学齢期の大半を過ごす子どもたちのこと。両親の文化(第一文化)と居住国の文化(第二文化)の「はざま」で育ち、独自かつ複合的なアイデンティティー(第三の文化)を形成するのが特徴